

風の中の子どもたち

師走の風が街路樹の枝をゆさぶり時折は氷雨が舗道にばらついて、アーケードのない県立病院前の歩道を人々は足早に通り過ぎていた。そんな風にわざわざ逆らうように走ってみたり、いわば悠然と歩いてみたりして、小学校低学年生らしい学校帰りの男の子が三人、声高に話しかけ合いながらその歩道へやってきた。アノラックと背中の中のランドセルが雨で冷たく光っている。

ちょうど病院の正面ゲート前、葉を散らして裸になったニセアカシヤの街路樹の根元近くに、ベニヤ板が一枚だらしくぶら下がって風に踊っていた。もう何か月も前の某代議士の演説会を知らせたポスターの残骸である。埃と泥水にまみれ色褪せながらもポスターの代議士は笑顔をくずさない。

子どもの一人が目ざとく見つけてかけ寄った。ポスターの表を出して街路樹の

根元にたてかけると、別に相談したわけでもなさそうなのに、他の二人は、垂れ下がっているビニール紐をひっぱり取って、飛ばされないように幹に回してくりつける。

病院前のバス停の窓から、その一部始終を私が見ているのを知ってか知らずにか、子どもたちの「あそび」はまだつづく。最初の子が、やおら帽子を脱ぐとポスターに語りかけ始めた。

「おお、お気のどくな。さぞつめたかろのう」

「おまえ、こんなに泥でよこれて、いま拭いてやるからな」

言いながら、写真の顔の泥を手でぬぐっている。他の二人も、替わる替わる手でポスターを撫でながら、

「ほれ、ほおべたに、こんなシミをこさえて。あ、ここは破けてしまったなあ」

「北風が吹いてさむかろうに。あれあれ鼻からつららを下げてござらっしゃる」などと口々に言っている。

「そうじゃ。このかさこをかぶって下され」

一人がそう言って自分の帽子をポスターにさしかける。別の一人が、
「おらの手ぬぐいでわりいが、こらえてくだされ……でも、ぼく、手ぬぐいもってなかつたなあ」

と言うと、虚構の世界から急に現実へひき戻されてか、甲高い三人の笑い声が風に舞った。

岩崎京子の「かさこ地ぞう」である。たしか二年生の国語の教材であった。

子どもたちは学校で、「じいさまがお地蔵さんに笠をかぶせてあげる」場面の勉強をしてきたばかりなのであろう。担任がどんな先生なのかは知るよしもないが、子どもたちのイメージを思いっきり膨らますことのできた、いい授業をされたにちがいない。

「じゃ、バイバイ。またあしたくるからな」

鼻水をすすりすすり、子どもたちはこうポスターにあいさつすると、背中のランドセルをガチャガチャ鳴らして走り去った。